
異世界アルトガサル

馱作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界アルトガサル

【Nコード】

N1652W

【作者名】

駄作者

【あらすじ】

いつもと変わらない毎日を過ごしていた桜花。しかし突然2人の親友が目の前で消えた。2人の後を追うように自ら異世界へと旅立った。そして、自分は別世界の大天使の片割れの生まれ変わりだと知る。自分が選んだ道なので後戻りが出来ない桜花は覚悟を決めて異世界で生活を始めた

人物設定（前書き）

ネタバレ注意？

人物設定

名前

魔神まがみ

桜花おうか

性別・年齢

男・16歳

人種

異世界人

所属国

魔界・ルシフェル

魔人の国

職業

格闘家？

外見

髪・黒で肩までの長さ

瞳・黒

元々中性的な顔立ちだったが、ルシファーと1つになって男の娘になった

身長は自称170強(169)

性格

冷静でクールだが、一度外れると何処までも冷酷で残忍になる
そして可愛い者好き

子供が大好きだが、ロリコンではない

子供には兄・親みたいに接する
優先順位は可愛い者<自分<親友<友人<<<越えられない壁<<
<知り合い<他人

能力

覚醒・ルシファー

魔力・身体能力向上で金髪・瞳が紅になる

暴走・サタン

魔力・身体能力向上（ルシファー以上）で銀髪・瞳が真紅になる

神機

堕天使ルシファー

魔神サタン

備考

左手にルシファーの瞳、右手にサタンの瞳を宿している

瞳は覚醒時しか現れない

自分で普通と言っているが、大天使の生まれ変わりなので、異常なほど身体能力・知能が高い

平凡と思っているのは比べる相手が同じ様な大天使の生まれ変わりのジン・マキだった為である

降り立った場所は未開の地にある神殿

名前
伏沼

仁

性別・年齢

男・16歳

人種

異世界人

所属国

皇国・ラファスカ

翼人の国

職業

剣士

外見

髪・茶髪（染めてる）で耳のかかるくらいの長さ

瞳・黒

イケメンで身長が172ある

性格

熱血キャラだがキレると手に負えない

信頼している者をどんな事があっても信じきる精神がある・・・ヴ

ア力である

能力

覚醒・ラファエル

魔力・身体能力向上で髪と瞳が緑色になる

神機

大天使ラファエル

備考

右手にラファエルの力が封印されてるラファエルの瞳を宿している

桜花と違ってアルトガサルに直に召喚される
召喚された時に前世（大天使ラファエル）の記憶を思い出す
ラファエルの瞳は召喚された時にはもう宿していた
因みに降り立った場所は森の中

名前
くが
久賀 槇
まき

性別・年齢
女・15歳

人種
異世界人

所属国
王国・ガブライト
人間の国

職業
弓士

外見
髪・明るいオレンジで長さは背中までであるが、後ろで纏めて首が見える様に上げている
瞳・同じくオレンジ
小柄で胸は残念なくらいペタンコ！である

性格

いつも元気で誰にでも好かれる性格

元の世界ではファンクラブ（ペッタンコ！会）があるくらい

能力

覚醒・ガブリエル

魔力・身体能力向上で髪と瞳が水色になる

神機

大天使ガブリエル

備考

右手にガブリエルの力が封印されてるガブリエルの瞳を宿している
仁と同じでアルトガサルに直に召喚される

召喚された時に前世（大天使ガブリエル）の記憶を思い出す
ガブリエルの瞳は召喚された時にはもう宿していた

因みに降り立った場所は湖の中

第1話・召喚（前書き）

感想などがあれば嬉しいです

第1話・召喚

俺、まがみ魔神 桜花おうかは16歳で普通の高校一年だ・・・変な名字ではあるが

絶対に当て字だと思う

普通に読んだらマジン・・・あだ名もマジンだった
それ以外は普通の日本人だ
空手の世界全国大会で優勝したくらいだ

「早く帰ろうぜ！マ・ジン（笑）」

帰る準備をしてたら幼馴染み・・・昔からの知り合いの伏沼ふしぬま 仁じんが
教室に現れた

髪は茶髪で身長は172で普通の体型だが、握力が100以上ある
バケモンだ

「黙れ泥沼。今から行く」

鞆に最小限の教科書だけを入れてジンの方に向かう
ジンは俺と同じ平凡な奴だ・・・世界剣道大会で優勝したけど
2人とも武道しか取り得がないな

「これからどうする？ゲーセン？カラオケ？」

どっちかしかないのか？

カラオケは面倒だな・・・ゲーセンかな？

「そつだな。ゲーセ」

「ハイハイ！行くならカラオケっしょ！」

被せられた

ってか

「重いよ」

俺の背中に小柄の久賀くが 槇まきが乗っかってきた

ジンと同じで昔からの知り合いだ

髪は明るいオレンジで身長は143でペタンコ

目はツリ目で元気印の女子だ

「ウチは重くないよ！」

そう言いながら慌てて降りるマキ・・・気にしてるのか？

コイツも俺達と同じで世界弓道大会で優勝してる

視力が6・0の規格外

あり？・・・俺だけ副産物？が無いぞ

「カラオケは面倒だ・・・ゲーセンに行くぞ」

俺は反対する

俺って音痴だからな・・・かなりの

「え〜、じゃあプリクラ撮ろ」

ピョンピョンと跳ねながら笑顔で言うマキ

プリクラか・・・カラオケよりいいか

「3人で撮るなんて久々だな」

ジンが鞆を肩に担ぎ直しながら言ってきた
反対の腕を俺の肩回してきた

「何時もオウカが逃げるからね」

マキがジンの反対側に来て、腕に抱き付く
女子が腕に抱き付いてきて、こんなに嬉しくないのは初めてだ

「逃げないから離してくれ」

ガツチリ逃がさない為の抱き付きだからな

「何処のゲーセンに行く？駅前？」

「あそこは小さいよ。もっと大きなゲーセンに行こう！」

2人が話しながらグイグイと俺を引っ張る
そんな平凡でつまらない毎日が続くと思っていた
ジンとマキが階段を降りた瞬間までは……

「……どうなってる」

ジンとマキが階段に第1歩を踏み出した瞬間2人が消えた
急いで足下を見ると、そこには階段ではなく真っ暗な闇が広がってた

「2人は此処に落ちた？」

理解できない

そんないきなり人が消えるなんて

兎に角2人が心配な俺は周りを見渡す

「チツ」

誰も居ないのか

鞆の中の物を放り投げて空にする

そして近くにあつた掃除用具入れの中から箒を取り出して柄を取り外した

「何があるか解らないからな」

鞆は荷物入れ、箒の柄は即席の武器になる

「んじゃ、行くか！」

俺は頭が混乱しているのに、冷静に物事を判断できていた事に少し驚いた

そして不安な気持ちのまま闇の中に飛び降りた

その時俺は不謹慎にも、この有り得ない事態を楽しんでいた

俺の顔は歪んだ笑顔が浮かんでいたと思う

闇の中に入って直ぐに水に飛び込んだような違和感を感じた

擬音で言つとドボン？

呼吸は出来るので本当に水の中では無いようだ

「おうおう！ やつと来たか！ 待ちくたびれたぞ！」

何処からともなくガラの悪そうな声が聞こえた

箒の柄を握り締めながら周りを警戒する

正直素手の方が強いのだが、相手がどんな姿なのか解らないからな

・ ・ 殴つた相手が全身棘だったら笑えない

「コツチだよ！ 早く来い！」

・ ・ ・ どちらに行けばいいんだらうか？

全て黒くて何も認識できない

「・ ・ ・ 何も見えないのだが？」

「チツ ・ ・ ・ しょうがねえな！」

俺の話聞いてくれた？

思つたよりも良い奴なのか？

「・ ・ ・ ツー！」

いきなり何かに胸倉を掴まれて、有り得ない程の力で引つ張られた

その時に鞆と箒の柄を離してしまった

マズい！ 丸腰だ！

直ぐに引つ張る力が無くなり、前のめりに倒れるのを防ぐ為に踏ん張つた

「じとつちやく」

前を見るとソファーに銀髪の男が座ってテレビを見ていた
俺は男の後ろに居るので顔は見れなかった

「あんたは？」

「まあ、座れよ兄弟」

・・・俺に兄弟は居ないはずだ

男は右手を頭の横まで持つてきて、自分の横をチヨイチヨイと指差した

俺は男の指示に従って移動する

男の隣に移動した時にテレビと男の間に小さなテーブルがあるのに気が付いた

テーブルには落としてしまった鞆と箒の柄が並べて置いてあった・・・
・何時の間に？

「先に言つとくぞ。お前は選ばれたんじゃない、お前が選んだんだ」

俺がソファーに座った時に、男はニツコリ笑つて言つてきた

男の顔は中性的だけど、男の勇ましさと女の可憐さの両方を持ち合わせた秀囲気だった

瞳は真紅で目つきは鋭い

「どつ言つことだ？」

「言葉の通りだ。お前は自分の意志で此処に来ただろう？」

・・・確かに自分の意志で闇に飛び降りたな

「だから、お前に拒否権は無いからな」

「すう……はぁ……わかった」

一度深呼吸してから答えた

覚悟を決める為と冷静になるためだ

「先ずは歴史だな。とある世界をとある五人の大天使が創った。その大天使達の名前はルシファー、ミカエル、ラファエル、ガブリエル、ウリエルだ」

「キリストの四大天使と墮天使か」

「……続けるぞ？」

頷きながら聞いてきたので頷き返す

「ルシファーは生と死を司り、ミカエルは火を司り、ラファエルは風を司り、ガブリエルは水を司り、ウリエルは土を司った。司ると言ってもその属性の力しか使えないってわけじゃねえ」

「だろうな。生と死を司るルシファーは何も使えない事になるからな」

生と死……再生と破壊……創造と消滅？

「さすがに兄弟。理解が早くて助かる。大天使達は世界を創った後、星を創り生命を創った。ルシファーが魔人、ミカエルが龍人、ガブリエルが人間、ウリエルが獣人、ラファエルが翼人だ。そして混合で魔獣・魔物・動物・幻獣だ」

・・・難しくなってきた？
今まで普通に聞いてたけど、結構凄いことを聞いている？

「大天使達の人々と共存してたため、かなり高度な文明になった。しかし、人々が星・アルトガサルを生態系・環境を破壊し始めた」
いきなり暗い話になった？

「その時大天使達の意見が2つ別れた。人々を滅ぼす派と改心させる派だ」

「何となくわかった。滅ぼす派がルシファーで、改心させる派がその他4人だな」

「よく解ったな！まあ俺がルシファーなんだがな！」

マジか！

笑顔で言われても困るぞ！

「ルシファー・・・俺の力は他の4人の合計と同じだった。だから1対4での戦いは7日間続いた。そして7日目に全てが終わった。俺の双子の姉妹のミカエルによって俺の力を二つに分離させられて封印された。」

そう言ってポケットから、それぞれ中心に黒い光と白い光の入った珠を2つ取り出した

「その時に俺も同じく4人の力を封印したんだかな」

クックククツと悪役のように笑うルシファー
ってか、さっき姉妹って言った？

「ルシファーって女？」

「ん？・・・ああ、ルシファーの時は女性だ。サタンの時は男性。
もつと簡単に言うと、生の力を使う時は女性、死の力は男性だ。正
反対の力だからな、いろいろ反転するんだよ」

だから中性的で相反する雰囲気を出してるのか？

「そして俺は全員の力の珠を異次元に封印した」

じゃあ此処はルシファーの力が封印された次元なのか

「ミスって魂の半分を置いてしまった・・・それが俺な」

半分？

じゃあ残りの半分は？

「お前だ」

俺を指差すルシファー

「いやいや待て待て、俺は別次元の住人だろ！」

「俺達の魂はお前の居た世界に転生したんだ。そして今回アルトガ
サルで大天使降臨の儀式が行われた。見ただろ？自分の目の前から
人が消えたのを」

・・・ジンとマキも大天使の生まれ変わり？

「どの人種も大天使を崇めるから悪いようにはされねえよ」

「なんで儀式を？」

「今5つの人種が戦争をしてるからな。戦力にする為だろ。因みに大天使同士の戦いでお互い半分ずつ成功したんだ・・・文明は崩壊して人口の8割が死んだ。だから改心して全てが元に戻った。無駄にならなくて良かったよ」

カラカラと笑うルシファー

「それから俺達大天使には特別な物がある。それは神機だ。簡単な話ロボットだ。それを真似て造られたのが人機だな。今では過去の遺産として使われてるけど」

要するに何がしたいんだ？

「此処にいるのも飽きたからお前と1つに戻る。カモ戻す・・・多分他の4人は、もう力を得てアルトガサルに降臨してるだろうな」

「降臨する場所は決まってるのか？例えば儀式の場所だったり」

「んにゃ、適当だ。一応自分の眷属の領土内ではあるけど。他の4人も一緒だ」

「じゃあ俺は魔人の国？」

「そうだ、魔王が頂点の魔界・ルシフェル。あと国王が頂点の王国・

ガブライト、帝王が頂点の帝国・ミルバナ、教皇が頂点の皇国・ラ
ファス力、族長が頂点の共和国・ウルトマだな・・・俺と1つにな
れば知識として解るから安心しろ」

ルシファーはテーブルに珠を置いて鞆と箒の柄を持った

「好きな方を選べ。1つを創造し直してやる・・・まあお手本だな」

鞆と箒の柄か・・・鞆かな？

向こうに行ったら箒の柄なんかよりも良い武器は沢山あるだろうし

「鞆だ」

「わかった」

ルシファーは箒の柄をテーブルに置いて、鞆を持って何かの呪文を
唱え始めた

その時に若干胸が膨らんだ気がした

「出来た、中をこの次元と繋げた。だから無限に荷物が入れぞ」

そう言って鞆をテーブルに置いた

「両手を出せ。手の甲を上にしろ」

言われた通りに手を出す

そしたら、右手に黒の珠を、左手に白の珠を押し当てて、すんなり
中に入った

「後は一つになるだけだ」

そう言って俺の顔の前で指を鳴らした
その瞬間に俺の意識は無くなった

第1話・召喚（後書き）

あと2人の大天使の生まれ変わりは未定です

第2話・盗賊（前書き）

お気に入り数0

がんばろ

第2話・盗賊

俺がアルトガサルに降臨？して一週間が過ぎた

正確には10日間だが・・・

ルシファーと1つになったのでこの世界の全ての過去を知識として理解している

きつとあの時のテレビはアルトガサルを見てたんだろ

因みに筭の柄は記念として鞆の中に入れといた

鞆は口よりも大きい物は入らなかった

無理をして壊れたら嫌だったから、それなりに使ってる

降臨？した場所が遺跡だったから色々な物を手に入れられた

剣や槍、盾などを手に入れられたのが一番嬉しかったな

それから変な蒼玉も手に入れた

正直使い方が解らないから置物にしかないけど

そして今俺は・・・

「なんで・・・なんで俺が・・・」

「チクシヨ・・・」「シクシク」

盗賊に捕まってアジトに運ばれてる

この世界では奴隷制度があり、最低限殺さなければ何しても良いらしい

各国も自分の人種以外ならどうなっても良いと考えてるみたいだから魔界・ルシフェルでは魔人以外なら奴隷に出来る

周りの捕まった奴らがウザイくらいうるさい

馬車の端っこで見渡すと、三十代男性が2人（人間）に二十代女性が1人（獣人）、俺と同じくらいの子供が1人（翼人）の4人いた俺を合わせたら5人だな

俺は人間だと思われたんだと思う

「今日は大獵だったな！」

「そうですね！翼人の子供が手に入るなんて思いもしませんでしたからね！」

盗賊達は嬉しそうでテンションが高くペラペラと奴隷価格の情報を話している

翼人は高く売れるらしい

やっぱり空を飛べるからか？

唯一の鞆は盗賊に奪われて、両手に木の手錠をはめられてる俺は騒いでる奴らを見殺しして寝っ転がった

「何でお前は！そんなに落ち着いてるんだ！」

「そうか！助けが来るんだな！？そうなんだな！？」

人間の男性2人が近付いてきた騒ぎ出した・・・本当にウザいな

「黙れよ・・・騒いだって何にもならないだろ」

「なんだと！！・・・っ！」

文句を言ったら1人がまた騒いだので睨んだら黙った

そうやって始めっから黙ってればいいんだよ

さらに馬車に揺られて30分が過ぎた時に盗賊のアジトに着いた時刻は夕方、もう直ぐ夜になる

盗賊達は俺達を奴隷商人に売るのは明日にするみたいだなので一時保管として俺達はアジトの牢屋に入れられたその間に一番下っ端を確認しとくか

寝たフリをしながら盗賊達を観察する

「クソツ！やっぱり自由になるには、奴隷闘士になるしかないのか」
奴隷闘士・・・奴隷が自分自身を買える唯一の方法だったな

しかし、奴隷闘士は武器を闘技場に武器を持ち込めないので素手で闘うしかない

武器を得るには観客から投げ込まれてなければならぬ

武器を投げ込んだ観客は勝てば賞金が倍、負ければ武器は没収で掛け金が三倍になる

デメリットの方が大きいため誰もやらないが・・・

まあ使うのがただの人だからな

訓練された奴じゃないから勝てるはずがない

しかも闘技場の勝敗は相手を殺すか、負けを認めさせて勝者が承諾する・・・承諾されなかつたら続行

だから合法的に人殺しが出来る場だ

「よっっ」

だいたい盗賊達の上下関係を理解したので立ち上がる

盗賊は5人しか居なかった

他の捕まってる奴らが不思議そうに俺を見てきた・・・否、馬鹿にしたような目つきだ

鉄格子の前に移動する

「どうしたんだ？嬢ちゃん」

俺が鉄格子の近くに移動したことに気が付いた盗賊の1人が話しかけてきた

ニタニタ笑って気持ち悪いな

それから俺は嬢ちゃんじゃねえよ！・・・ルシファーと1つになつてから女顔になったが

「命乞いか？服を脱いで尻を振れば考えてやってもいいぜ？」

俺の前にいる盗賊Aの言葉で、他の盗賊達がゲラゲラと笑い出した

「喋るな、口が臭うだろ。歯を磨け」

「あ？・・・てめえ調子にのびよっ！！」

俺の言葉で盗賊Aが近付いてきた時に男の勲章を蹴り抜く
盗賊Aは前屈みに倒れてピクピクしている

「なんだ。ただのバカか」

盗賊Aの頭を踏みつけてトドメをさした・・・殺しては無い、気絶しただけだ

「何してやがる！」

盗賊B・C・Dが鍵を開けて牢屋に入ってきた・・・かなりの馬鹿じゃね？

「何でいちいち入ってくるかな？普通外から槍で突くとかだろ」

1人目が入ってきた瞬間に顎を上段回し蹴りで蹴って脳震盪起こさせる

足がガクガクして倒れた

2人目は腹を蹴ると見せかけて腹をガードした時に、軌道中段蹴

りから上段回し蹴りに変えて同じく顎を蹴る
ブラジリアンキックだったかな？

「・・・てめえ何者だ？ただの人間じゃねえな？コイツ等はどつや
つて捕まえたんだ？」

盗賊Dが倒れてる盗賊達を見下ろしながら言う

・・・言えない

三日前から寝てなくて限界がきて寝てた時に捕まったなんて！

始めの数日は遺跡で過ごしたから安全だったし食料もあったから大丈夫だったけど、未開の地で野宿なんて出来ないから寝てなかったんだよ！

「・・・」

お互いに構えながら盗賊Dを観察する

今までの盗賊は人間だったけど、盗賊Dは龍人みただ

赤毛で目が金、鋭い牙が目立つ

背中にはボロボロの翼・・・飛べなくなったから盗賊に墮ちたのか？

「そんな事どうでもいいだろ？あとはお前だけだな」

牢屋に入って来なかった盗賊Eは腰を抜かしてる

盗賊Eも人間かな？

目立った特徴がないし

「アイツは下っ端だから期待してねえよ」

やっぱり一番下だったか
ならアイツで決まりだな

「なに余裕かましてんだよ！」

盗賊D（多分頭）が剣を振り下ろしてきた・・・ラッキー
半歩下がって木の手錠で受け止める

「無駄だ！」盗賊Dの言う通り、手錠は剣によって左右に切り裂か
れた

「・・・あ」

盗賊Eが気付いたみたいだ

「ありがとう。自由にしてくれて。これで両手が使える」

「チツ！」

「させつかよ！」

盗賊Dが下がろうとしたので、右足で足を踏んで逃がさないように
する

そのまま右の上段突きを放つ

「クッ」

が、顔を逸らして避けられた

「まだ続くぞ！」

突き出した右手で盗賊Dの後頭部を掴んで引っ張る

それに合わせて右膝蹴りを放つが剣を手離れた盗賊Dにガードされた

「・・・堅いな」

人間の蹴ったとは思えない感触だった

「お前、龍人とやり合うのは始めてか？龍人には剣をも弾く鱗があるんだよ！」

そう言いつつ殴りかかってくる盗賊D

俺は盗賊Dの攻撃を受けるのではなく流して避ける

確か人種によつて特殊な力があるんだっけ？

龍人は鱗と火炎を吐く

獣人は驚異的な身体能力（地上限定）

翼人は驚異的な身体能力（空中限定）

この3人種は身体的なものだな

人間は高速魔法展開

魔人は魔法同時展開

この2人種は精神的なものだな

「・・・確か人間と魔人以外は魔法が使えないんだっただな？」

盗賊Dの攻撃を避けながら言う

メリットがあればデメリットがあるんだよな

「何で当たらない！」

盗賊Dはだんだんイライラしてきたようだ

ずっと流してよけてるからな

普通の身体能力で勝てないけど、俺は技術で戦ってるからな

力が技に勝つのは無理なんだよ・・・圧倒的でない場合は

「確か水の魔法は・・・【大気に溢れる水よ。我に力を】」

詠唱を完了してから盗賊Dの胸に右手を当てた

「しまっ
」

「【アクアショット】！」

俺の右手から水が吹き出して盗賊Dを吹っ飛ばした

その時に奴隷（仮定）が嬉しそうに歓喜をあげた・・・何が嬉しいのかね？

「まだだ！」

盗賊Dが水浸しになりながら立ち上がった

「十分でしょ？【大気を運ぶ風よ。姿を変え、我に力を】」

「ま、まさか！」

「【ライトニング】」

風の上位魔法の雷を盗賊Dに放つ

盗賊Dは感電して気絶した

「やった！俺達は助かったんだ！」

「早くこの手錠を外してくれ！」

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「・・・良かった」

男性A・男性B・女性・子供の順で俺に感謝の言葉？を言うてくる
・・・何で感謝されるんだ？

「何を言っただ？」

「君が盗賊達を倒してくれたから俺達は自由なんだ！」

男性Aが俺に近付きながら言っしてきた

ああ、コイツ等勘違いしてるな

「お前たち勘違いをしてるぞ？」

「何がですか？」

不思議そうに言うてくる女性

「盗賊を倒したんだから、お前達の所有者は俺になったんだ」

「お、おい！何を言っただ？」

「解りやすいように説明してよ」

男性Bがヨロヨロと近付きながら不安そうに言うてきた
子供も顔が引きつりながら聞いてきた

「売り主が盗賊から俺にになったただけだ」

俺は全員にわかりやすいように、ニツコリ笑いながら言った
その瞬間全員の表情が絶望に変わった
やっとう理解したか

因みに奴隷（仮定）は今倒した盗賊達もプラスだ

「かなりの金になるな」

倒れてる盗賊に手錠をして牢屋に突っ込んだ
一休みしてから売りに行くか

第2話・盗賊（後書き）

魔法は人間・魔人なら誰でも使えますが、練習しなければ使えません
それから平民？は魔法を使う機会が無いので覚えてません

因みにオウカが使えたのは知識として知っていたからです
なので、無理矢理魔法を発動させてる感じです

・・・感想・その他よろしくお願いしますorz

第3話・人身売買（前書き）

お、お気に入り数が増えた!!

ありがとうございます!!

第3話・人身売買

盗賊のアジトで一泊したあと、盗賊E（下っ端）に案内させて一番近い都市ガサルに到着した

因みに盗賊Eは魔人だったのでこの国ルシフェルでは奴隷に出来ない事から見逃す代わりに案内人にした

人間と魔人の外見的区别が難しい

見分け方は魔人の瞳は竜みたいに縦長つてだけで、あとは人間と変わらない

それから案内人（盗賊E）に宿屋、道具屋、武器屋の場所を聞きながら奴隷館に着いた

宿屋は普通に泊まる為で道具屋・武器屋は盗賊達が持っていた銅の剣・皮の胸当てを売る為だ

盗賊D（龍人）が使ってた鉄の剣は自分の装備にして腰に差している遺跡で手に入れた武器は何かしらの魔力付加が付いてるみたいなので危なくて使えないからな・・・箒の柄どうしよう？

「此処が奴隷館です。奴隷を買う時は正面から、売る時は裏から入ります。入り口に使用人が立っているので話し掛ければ大丈夫です」

どうやら考え事をしてる間に着いたみたいだ

案内人が言う方を見ると、スーツを着た筋肉マッチョが1人立ってた

「そうか・・・お前も来い。案内の報酬を渡さないとな」

渡す理由も無いけど、逆恨みされても困るからな

「へ、へい！」

俺は馬車が止まってから奴隷館裏口に立ってる男に近付いた

「あゝ、奴隷を売りたいのだが・・・？」

チラツと馬車を見ながら男に言う

男は馬車に近付き中を確認すると戻ってきた

案内人も俺の横でソワソワ待ってた

「少々お待ち下さい・・・若いのにたいしたものだ（ボソツ）」

「わかった・・・お前来るのは始めてか？」

使用人の呟きを無視して話を続けた

使用人が中に入ってから案内人に聞く

「へい。いつもは留守番なので」

案内人を観察する

確かにひ弱でヒョロイ

こんな奴が奴隷を売りに来たら足下を見られそうだ

「お待たせしました。馬車を此方の倉庫へお願いします」

使用人と一緒にヘラヘラと媚びを売るように男が現れた

使用人を肉体労働派と見るなら、今来た奴は頭脳明晰派と言ったところか？

服装もキラキラと装飾品が輝いている・・・相手と対等に、もしくは威圧するためだろうか？

馬車を倉庫に入れて奴隷達（8人）を出して一列に並べた

元盗賊達は案内人を睨み、それ以外は俺を睨んできた

「人間の男性が5人に龍人の男性が1人、翼人の男性が1人に獣人の女性が1人、合計8人ですね・・・では、失礼して【オープン】！」

鑑定人？が呪文を唱えた瞬間、奴隷達の胸から手のひらサイズのカードが出て来た

鑑定人？が端から全員の浮いてるカードを取って見て行く

「あのカードは何だ？」

案内人にしか聞こえない声で聞く

正面（鑑定人）を見たまま聞いたので、案内人がキョロキョロする

「キョロキョロするな。質問に答える」

「へい、簡単に言えばステータスです。名前、性別、年齢、人種、職業などが書いてあります。職業を変える時はあのカードを書き換えるんです。奴隷にする場合も同じです・・・まあ書き換えられる人物は限られますが・・・」

案内人も鑑定人を見ながら小声で答えてくれた

奴隷達を見ると全員絶望の表情を浮かべてる・・・1人違うな

龍人の男だけは俺に殺意を向けてる

正直俺も奴隷達を助けたかったが、この世界に来たばかりで、何の力も無いからどうしようもなかったと言いついておこう

他人を助けて自分が傷付いたら意味がないからな

「お待たせしました。全部で千九百万ガルドでいかがでしょうか？相場が1人につき二百万ガルドです。それから翼人がプラス百万

「ガルド、龍人は元戦士でしたのでプラス二百万ガルドでの値段となります」

鑑定人が俺に言ってきたので、チラッと案内人を見ると軽く首を振られた

「まだプラスに出来る要素が有るのか？」

「奴隷達を見て少し考える」

「性別はプラスされないのか？それからその3人は盗賊だ。戦士でプラスされるなら盗賊でもプラスされるだろ」

「盗賊も戦士と同じで戦う事が出来るからプラスされるはずだ・・・
実力の差は天と地ほどだが

「軽く睨みながら言う」

「この鑑定人俺をガキだと思って値下げしやがったな？」

「し、失礼しました！女性でプラス二十五万ガルド、盗賊でプラス二十五万ガルドです！百万ガルドですので合計二千万ガルドになります！」

「鑑定人が慌てて言い直した」

「若干顔色が悪いな」

「使用人が軽く腰を落として構えた・・・すぐ暴力に頼るのってヤダね」

「それで良い」

「使用人を警戒しながら言う」

「マナーカードはお持ちですか？お持ちでなければお造りしますか？」

マネーカード？
持っていないな

「いや、頼む」

「それではお造りします。千ガルドになります」

「わかった」

鑑定人はそそくさと倉庫を出て行った

「マネーカードとはガルドを貯めておけるカードです。銅・銀・金は貴重ですのでカードで支払うんです」

案内人が鑑定人が消えた瞬間に説明してくれた

クレジットカードみたいなものか

それから少ししたら鑑定人が現れた

「此方がマネーカードになります。念じれば金額が浮かびますので」

貰ったマネーカードに意識を集中させたら千九百九十九万九千ガルドとカードに浮かんだ

結構な金額だな・・・実はこの世界は全体の物価が高いのか？

それとも人だかり高いのか？

「奴隷はお買いになられますか？役に立たない子供・老人なら二百万ガルド、普通の奴隷なら三百万ガルドが相場です。さらにオプシヨンが付く場合はその時にプラスされます」

売る時は定価の2/3かな？

「役に立たない子供・老人は性別で値段は変わりません」

「・・・いや、俺は最近旅を始めたばかりだから知らない。今回の
奴隷売買も路銀の為だからな」

下手に人が増えたら動きが制限される

最低でも拠点を得てから考えた方がよいだろう

「路銀の為に人を売るなんて・・・恐ろしい人だ（ボソツ）」

俺から離れながら言う鑑定人

・・・確かに普通なら考えないわな

もう一度言うが、俺には自分をも守る力がないんだ

「それじゃあ、失礼する・・・報酬だ」

案内人に五百ガルドを渡して奴隷館を出た

案内人とはその時に別れた

因みに支払いの方法はカードを向き合わせて念じれば完了らしい・・・
・便利だな

それからバックから銅の剣×3・皮の胸当て×4を売った

値段は銅の剣は四十五ガルド×3、皮の胸当ては二十五ガルド×4
だった

銅が貴重って言ってたけど安かったな

ついでに周辺の地図を十五ガルドで買って宿屋に向かった

「いらっしやいませ！ようこそ宿屋アサルへ！」

宿屋に入った瞬間に受付の人が声をかけてきた

宿屋は入って左側に食堂？があり、部屋は二階からとなっているみたいだ

「一番安い部屋を頼む。それからお湯と飲める水も頼む」

受付に近付いて頼む

そう言えば俺って、この世界の字が読めるんだよな
きつとルシファーの記憶だろう

「宿代が五十ガルドでお湯・水合わせて三十ガルドになります。全部で八十ガルドになりますますがよろしいですか？」

「構わない・・・一泊の料金か？」

「はい、基本冒険者の方々が泊まりますので。お食事も別料金ですが、如何なさいますか？」

「貰おう。いくらだ？」

「お食事代は食べる時に食堂で払ってもらえれば結構です」

「わかった」

「それでは案内します」

受付のおっちゃんが先導して二階に上がった

「此方です」

扉に103と書かれた部屋だった

中を覗くと安いベットとタンス、小さなテーブルと椅子があるだけだった

「いかがでしょうか？」

「ありがとうございます」

マネーカードで払って、鍵を貰ってから部屋に入った

「ふう・・・今日は良心が痛む一日だったな」

ベットに座りながら、窓から外を見る

何時の間にかもう夕方になっていた

そう言えば盗賊のアジトを出たのが午前中だから昼は食べてないな
鞆をタンスの中に入れてから部屋を出て食堂に向かった

「コカトリト（鶏？）の唐揚げ、アイフィス（秋刀魚？）焼き・・・
丼？」

メニュー表に丼って書いてあるだけだ

小さいメモを見ると、ご飯の上に旬な野菜をひいて、ブルフ（牛？）
の焼き肉を乗せた物って書いてある

「じゃあ、丼で」

食堂のおばちゃんに注文して料金を払う

料金は二十ガルドだった

装備よりも料理の方が高い？

この世界の金銭感覚が全然解らないな

「あいよー！」

空いてる席に座ってご飯を食べて、部屋に帰ったら鞆の中を少し整理して寝た・・・始めてのベットだ
直ぐに安眠できた

第3話・人身売買（後書き）

魔神 まがみ
桜花 おうか

装備

頭・無し

上半身・学ラン（上）

下半身・学ラン（下）

腕・無し

靴・革靴

武器

鋼の剣

アイテム

四次元鞆

所持金

19998620ガルド

第4話・ギルド（前書き）

なんとなくタイトル名を変えてみました

第4話・ギルド

久々にぐっすり眠れて果物でないご飯を食べれたので、弱っていた体に力が漲ってる

「・・・顔を洗いたいな」

昨日頼んだお湯が冷めて水になってる桶を見ながら呟く

あのお湯で体を拭いたから、汚くは無いと思うけど・・・気持ちの問題だな

「魔法で出来るか？」

桶の水をトイレに流して空になった桶の上に手をかざす

「【大気に溢れる水よ。我に力を】」

おっ！

桶に水が溜まってきたぞ

成功か？

「・・・ちよっ！ちよつと待て！止まらない！桶から水が溢れる！」

・・・桶から滝のように水が流れ出た

微調整が難しいな

やっぱり知識だけだと駄目だな

誰かに教わった方が良いかも・・・

主人に零した事を言ったら、朝食の間に片付けてくれるらしい

朝は軽くパンとココトリトの卵焼きにした

飲み物は果物まる絞り？を頼んだ
100%とどう違うんだろっ？

「これからどうしよう？仁・楨と合流・・・何処にいるか解らないから却下だな」

テーブルにガサル周辺の地図ではなく、盗賊のアジトにあった世界地図を広げる

大国が5つに小国が点々と書かれている

一番北に人が住めない魔の大陸があり、その入り口に魔界・ルシフェルがある

魔の大陸には大天使達をも超えるかもしれない魔神・獣神などが住み着いてる

ルシフェルの南東に獣人の国があり、その南に翼人の国がある
獣人・翼人の国を合わせたくらいの大きさで両国の西に人間の国がある

最後に一番南に龍人の国だ

国の大きさは

人間＞魔人 龍人＞獣人＞翼人だ

小国は混合種族みたいだな・・・突然変異とか居そうだな
鬼人やエルフが・・・

「・・・そう言えば闘技場って二つあるんだっけ？」

椅子の背もたれに体重を乗せながら呟く

確か賭をする為の闘技場とランクアップする為のギルド主催の闘技場だ

因みにこの世界にギルドがあり、様々な依頼があるそうだな

依頼にもランクがあり、自分のレベルにあったランクの依頼しか受注出来ない

上位の依頼を受けたい場合はギルドの闘技場で実力を示すしかない。
・・その前にある程度回数依頼をこなさなければならぬが
賭をする闘技場は奴隷闘士などが闘う闘技場だ

「・・・就活するか」

就活って言ってもギルドに行つて登録するだけだが・・・

「予定は決まつたな」

地図を畳んで鞆にしまつ・・・話し相手が居ないからずっと独り言を言つてる

話し相手が欲しいな・・・奴隷でも買うか？

それかパーティーを組むかだけど、パーティーだと一時的が多いみたいだからな

「とにかく登録しに行くか」

宿屋をチェックアウトしてガサルの中央広場にあるギルドを向かった
ギルドは唯一どの国にも属さない中立組織だ

だから登録した一つの国でしか活動できないと言つわけではなく、全ての国で活動できる・・・他国に行くかどうかは別として

ギルドの待合室の一番奥に受付嬢達が居て、右手のボードに無数の依頼書が張つてある

ギルドの受付嬢が居る場所まで歩く

俺が向かった受付嬢は、茶髪で綺麗よりも可愛いと言つた感じの人だつた

「すみません。ギルドに登録したいのだが・・・？」

「かしこまりました。此方の書類に名前、もしくは偽名と職業をお書き下さい」

偽名？

ギルドの受付嬢に申込書を渡されながら言われた

「偽名でもいいのか？」

「はい。ギルド登録者の中には有名になりたくない人、名前を公表できない人などもありますので・・・ぶつちやけると、依頼をちゃんと達成してくれば誰でも良いと言つ事です」

とびつきの笑顔で言われた

申込書を見れば

名前・偽名

登録国

人種

職業

と書かれていた

・・・ヤバイ

人種をどう書こうか

大天使は有り得ないとして、眷族の魔人って書くか？

それとも見た目通りの人間？

「書き辛いものは書かなくても良いですよ」

受付嬢が俺の葛藤を察してくれたのか、親切に教えてくれたでも人種だからなあ・・・。。。。。。そうだ！

名前・偽名

アベル

登録国

魔界・ルシフェル

人種

魔人と人間のハーフ

職業

格闘家

スラスラと書いて申込書を受付嬢に渡した

「確かにお預かりいたしました。それではギルドカードを作製しますので少々お待ち下さい」

受付嬢が近くの役員と少し話して裏に引っ込んだ暇だったので依頼書が張ってあるボードに近付いて、依頼内容を確認する

ランク無し

依頼内容・猫探し

報酬金額・十五ガルド

ランクG

依頼内容・荷物運び

報酬金額・五十ガルド

ランクG

依頼内容・野犬退治

報酬金額・六十ガルド

他にも沢山張ってあるけど、同じ様に依頼内容だな

確かギルドのランクは一番下がGで一番上がSSになってるな知識ではEXってのがあってなってるけど・・・？

特殊任務かな？王族から直接とか
因みに今の俺が受けられる依頼はランク無しかGだ・・・早くラン
クアップしたいものだ

「アベル様、お待たせしました」

受付嬢に呼ばれたので戻る

「こちらが登録証のタグとなっております」

トレイの上に軍人が付けるようなタグが置いてあった・・・まんま
だな

「ありがとうございます・・・素早くランクアップしたいんだけど、方法つて
ないの？」

首にタグを付けながら受付嬢に聞く
何時まで野犬退治だと訛るからな

「そうですね・・・時々大会が開かれるので上位に入れば試験を受
ける資格が得られます」

そんなのがあつたんだ

「今の俺で受けられる大会ってある？」

「3日後にランクGの大会がありますね。出ますか？」

「ああ、頼む。優勝したら飛び級したりできるのか？」

飛び級できるならしたいな

お金は沢山あるけど何かの時の為にランクは上げといた方が良いでしょう

「ギルド本部から派遣されてる人がいるので、条件を満たしてれば向こうから話し掛けられますよ」

「わかった・・・自分のステータスカードを見る事って出来るのか？」

知らない事はなるべく早い段階で理解した方が良くからな

「自分の胸に手を当てて【オープン】と言えば見れますよ・・・ダンジョンに言った事はありますか？」

急に話が変わったな

「いや無いな。何処かにあるのか？」

「はい。都市から北に少し行った場所に塔型のダンジョンが現れたらしいですよ。まだ2日しか過ぎてないので攻略者はいないと思います」

ダンジョンか

行ってみるかな？

「ありがとう。大会の登録もよろしく」

俺はギルドから武器屋に向かう

ギルドの登録で格闘家って書いたからナックルとレギンスが欲しい

剣を使う格闘家・・・居そうだけどなんか複雑だ

「いらつしゃい！何を求めで！？」

元気な店員だな

「ナツクル系と蹴りも出来るレギンスが欲しくてな」

「ナツクルは右の棚、レギンスはその下になります」

・・・武器屋なのにレギンスあつたんだ

今言つてから間違えた事に気づいたのに・・・まあいいか

店員に言われた通り、店の右側に移動すると様々なナツクルが置いてあつた

ガツチリ固定して殴りに特化したナツクル

拳に棘が付いてるナツクル？

特殊な布に拳と甲にだけ金属が付いた動かしやすいナツクルなどだ

「俺は特殊だからコレかな？」

打撃以外にも投げなどもするから、最小限の金属しかないナツクルを選ぶ

レギンスも同じ様に運動性重視のがいいな

特に足首が自由に動けるのが・・・軟金？

説明書？に見た事のない言葉が書いてあつた

「軟金つてなんだ？」

「軟金つてのは普通は布のように軟らかいの、強い衝撃の時だけ堅くなる性質の金属です」

何時の間に俺の後ろに居た店員が説明してくれた
・・・人の気配を察知する練習もしないとな

「じゃあ、この二つを頼む」

レギンスは軟金のレギンスにした

「へい、シフルナツクルにショックレギンスですね・・・合わせて
千八百五十ガルドになります」

一番高い買いものだな

マネーカードを店員のマネーカードと向かい合わせて払う

「着たいのだが・・・場所はあるか？」

「その小部屋をお使い下さい」

試着室だろうか

1人分の大きさの区切られた部屋があった

中に入ってナツクルとレギンスを身に付ける

不思議な事に両方とも俺の体のサイズに合わせるように萎んだ・・・
大きくなるのかな？

その後暇つぶしに北にあるダンジョンに向かって出発した
因みに革靴は鞆の中だ

第4話・ギルド（後書き）

魔神 まがみ
桜花 おしが

偽名・アベル

装備

頭・無し

上半身・学ラン（上）

下半身・学ラン（下）

腕・無し

靴・シヨックレギンス

武器

シフルナツクル

鉄の剣

アイテム

四次元鞆

所持金

19996770ガルド

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1652w/>

異世界アルトガサル

2011年9月11日21時43分発行